

第1グループ

1. 連携

: 探究科の教科がある。中高各学年で読書会あり、

一冊の本でディスカッション。朗読会や作家を呼ぶなど。

: 講演会とタイアップ選書、中学で朝読、高校3年で総合学習レポートの資料集め

: 読書科の時間、読書サロンに20人集まり本を語る、

図書委員会があまり機能していない

: 別室登校の場所となっており、授業利用できない: ビブリオバトル文化祭大会、

朝読や昼読に活用

2. 選書

: 6割資料本、4割小説、ツタヤとコラボ

: 年1回紀伊国屋に生徒10人くらいの生徒と本を選びに行く

第2グループ

図書システムについて

・ 統合 ICT のパソコンの入替えに伴って、年度当初の生徒の登録作業が今まで通りにできるのか不安である → 新入生の Excel データの名簿の取り込みはどうか？

・ 生徒・教職員の登録について

数年前から個人登録をしていない。生徒は自分の出席番号、例えば『1年1組1番』を使用し、2年に進級したらそのクラスの出席番号を使用する。教員は年度初めに出る【教職員名簿】の通し番号を使用。3年生への貸出しは2学期末までとし、生徒・教職員とも年度末には貸出状況がリセットされる。なので同じバーコードを数年間使い続けている。

本の返却方法

- ・本をどうやって返却しているか

借りた本人が書架に返却

一旦ブックトラック等へ返却してから図書委員を使って書架に返却

〃

担当教員で書架に返却

書架の整理については図書当番の生徒にお願いしている

予算

- ・公費は0～36万くらいと差があったが、どこもPTAから20万～35万くらい援助してもらっているとのこと

その他

- ・生徒の居場所づくりに図書館が使われている
- ・「図書」が分掌から外され、委員会組織に変わった。
担当者も他の分掌と掛け持ちのためしんどい。

グループ3

発表していただいた大阪府立東高等学校の石山先生に入っていて、東高校の実例についてさらに質問しながら各校の状況を出し合い、話し合いを行った。

1. 教科との連携について

- ・ 「総合的な探究の時間」を中心にして図書館と教科をつないでいる。
- ・ 新1年生オリエンテーションでは、生徒に本を手にとらせるきっかけになればと貸出を行っているが強制はしていない。生徒が好きに借りていく。
- ・ 「東高校の100冊」という冊子を1500部作って、新1年生オリエンテーションで配布
- ・ 各コーナーの説明もこの時に行う。

- ・ 本の情報は主に書店から収集している。本屋大賞ノミネート本は先取りして購入する。予算執行は年内なので、事務との相談となる。
- ・ 予算については「取れるところから取る！」例えば、教科の予算（国語とか？）学年費や進路費など、内容と理由が折り合えば「図書費」でなくてもいいのでは。
- ・ 探究の課題については前もって相談されるのでプランニングを行う。
- ・ 例：「できるだけ新書を読もう」「4000字でまとめる（2年生）」
- ・ 国語の時間にブックトークを行ったりする。

2. 選書について

- ・ 選書については基本的に司書教諭2名で行っている。
- ・ 必ず入れる本：「評論問題でその出典となるもの」「岩波ジュニア新書」

※新書はジャパンナレッジ School でデジタル本として読めるものがある。大変有効である。

- ・ 教科からは直接希望を伝えてもらう
- ・ 書店の本の並びには書店の思いがあふれているので、それをくんで本を選んだりもする。
- ・ 「選書基準」は特にない。予算面では具体的な話を管理職に提示する。
- ・ 芥川賞・直木賞・本屋大賞・課題図書以外の本では、どちらかと言えば生徒が買えない本（価格面などで）を購入する。自校の図書館にはないが、関連本を紹介して書店にあると勧めることもある。
- ・ マンガは主に寄贈
- ・ ライトノベルは生徒のリクエストがあれば購入するが、たくさん発行されているものは少しずつ購入している。

3. まとめ

どこの学校でもいろんな工夫で生徒に読んでもらおうとしていた。

「総合的な探究の時間」は入り口として連携しやすいと思われる。

アピールしやすいところから始め、どんどん教科に使ってもらえる図書館にしたい。

「ジャパンナレッジ School」など GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末の環境も利用し、図書館活動につなげていきたい。

予算の少ない中、どのように本を購入するのはこれからも課題である。